



日本盆栽作家協会会報

第25号

平成29年10月1日



盆栽は作家なくして作品なし 作品なくして芸術なし

盆栽は、十年手元に持つと、真に自分の「作品」となります。十年といわないまでも、最低でも五年は手元に持つて自分の「作品」として愛情をかけて欲しい。

それくらい心の余裕が無くては、楽しさがわいてこないし、心の眼も、真の審美眼も開けません。

そして、作家としての目的意識を持ち、個性的な作意と創意で作る。そこで初めて芸術たりうるものが誕生するのです。

日本盆栽作家協会は、盆栽界の発展のために真の盆栽の「作家」を育てていきたいと考えています。

第25回作家展

会期／前期 平成28年10月14日(金)～10月19日(水)
後期 平成28年10月21日(金)～10月26日(水)
会場／さいたま市大宮盆栽美術館
主催／日本盆栽作家協会

前期 (後期はP15より)



五葉松（銘：福寿丸）
鉢：紫泥長方
山田登美男（埼玉県）

高山植物で松の王様といわれる五葉松は、日本を代表する品位の高い松として、大変に人気があります。盆栽で日本の景色を表現するに最も適しているからです。この福寿丸は過去2回の国風展に出品されていますが、今回は20年ぶりに新たな姿になっての出展となります。



第25回 作家展（作品の説明をする須藤幹事）



五葉松（銘：素老） 鉢：萬留平造 須藤 雨伯（栃木県）

一雨降ったあとの緑の美しさ、松の葉の光り、気取ったように葉先をそらせて空を向いている姿、耳に聞こえない生命の喜びがひたひたと満ちてくる御仏の心が姿を現している。



長寿梅 鉢：和均釉袋式楕円 今井 千春（神奈川県）

この長寿梅を入手して8年になります。株立としてのまとまりを考慮し、小枝作りをしてきました。2年前に「国風展」（毎年2月に東京上野の東京都立美術館で開催される国内最高峰の盆栽展）への出品を果たしましたが、更なる樹格向上を目指し培養しているところです。



真柏

鉢：紫泥外縁木瓜式樹盆

秋山 実（山梨県）

真柏の特徴として、「水吸い」と呼ばれる、褐色の生きている幹が捻れながら成長することがあげられます。また葉性が良く、葉の小ささ、細かさが景色を大きく表現するのに向いています。これらの良いところを活かしながら、数年かけて間伸びした枝を小さく棚分けする事を心がけて作り上げました。

長寿梅

鉢：白交趾胴紐楕円

小林 國雄（東京都）

この長寿梅は30年前に入手。石の動きとしっかりと石に食いついた状態が気に入り、今まで培養をしてきました。赤い花に対し、白交趾楕円鉢で調和をとってみました。





赤松 鉢：朱泥長方 福舘 治（岩手県）

本作は、入手当初は丸幹でしたが、自然味を出そうと、白色のシャリ部分を彫刻して、時間を掛けて少しずつ広げていき、現在の姿となりました。落ち枝の動きも面白く、本作の見所の一つとなっています。



五葉松 鉢：行山長方 阿部 健一（福島県）

27 年前に樹高 3m 位あったものを切り詰め、同時に正面と左側の太い走り根を切り、根回し（根の周囲を切り詰めて細根を発達させておくこと）を行い、その 2 年後に鉢植えをして、最初の整形を行いました。その後、切り詰めた幹上部と走り根の下部より枯れ込んでゆき、長い年数の中で現在の白骨化したシャリ幹となりました。「空間有美」すなわち自然らしさの表現を常に心がけています。



皐月（八咫の鏡）
鉢：広東緑釉隅切長方
神 康文（東京都）

本作は、原木から作りはじめて 4 年になります。幹模様がより引き立つように枝の配置に緩急を持たせながら作りました。

五葉松 鉢：銅水盤
吹田 勇雄（宮城県）

この作品は、中国山東省泰安市の名峰泰山を訪れた際に、山の景色に感動してその風景を写したいと挑んだものです。断崖にへばり付く様子を表現したいと思い、枝を簡略化し、作り込みました。雄大な自然美を感じて頂けたら幸いです。広く異国の文化や風趣に触れ、それを取り込みながら自分なりの盆栽道を極めて行きたいと考えています。





オモトをテーマにした浮世絵
豊原 国周 Kunichika Toyohara (1835-1900) 作

将軍の園芸癖が花開く！

日本盆栽作家協会代表幹事

山田登美男



江戸時代の文化文政・嘉永期に盆栽、園芸関係が大きく花開いている。

私の祖先の初代庄之助、二代目初五郎の時代、根岸の里や下谷近辺でサクラソウ（桜草）の品評会が行われていたそうで先代の三代釜次郎が古老に聞いた話などまとめてみました。

園芸の楽しみが庶民まで広がり、と楽しみ方の興じる人々が現れるよう、俳諧や狂歌などの集まりと同様、江戸の園芸はこの国にもないような特異な展開をたどっている。

盆栽のほかにサクラソウ（桜草）、オモト（万年青）、マツバラン（松葉蘭）、セッコク（長生蘭）など愛好家の間で熱狂的なブームを呼んだらしい。

また品種改良が進み、サクラソウは天明～寛政年間（1781～1801）下谷周辺で流行し、旗本、御家人ら武士から町人まで広く流

行が及んだようです。その品種は100種にも上って、すさまじい栽培ブームを起し盆栽やオモト等は浮世絵師が「オモト図」やその他多くの作品を作って世に残している。

流行が流行を呼び投機の対象になって驚くべき高値が付けられ、一鉢が百両、二百両も珍しくなかったという。

大阪で二千三百両（約一億円）の値が付いた例を平賀蕉翁は記している。別名「百両金」と呼ばれたのも高値売買のためである。

四谷在住の旗本、水野忠暁などが奇品栽培の中心人物であったらしい。

私共の初代、二代目などは、よく浅草の雷門付近で夜店に出たらし、オモトなどを扱い失敗をし、以後流行品は絶対に扱わないことが家訓となっている。いわゆる「不易流行」の教訓である。

しかし、こうしたつながりが爛

熟した園芸文化を生み出す母体となり、伝統文化となり江戸時代の園芸は高い教養に支えられた芸術と考えられるのです。

現在、サクラソウはさいたま市の花に制定されており、更に平成22年度には桜区の花にも制定されて楽しまれています。

また、同区内の田島ケ原に国指定の特別天然記念物として、サクラソウ（約150万株）があり、ノウルシなど多くの貴重な野草と共生する形で自生していて、3月に芽を出し、4月頃まで多くの人々を楽しませてくれている日本の花です。





第8回 世界盆栽大会 in さいたま

28年前の日本での第1回大会の頃よりも更に飛躍的に世界中に愛好者が増え、今や「BONSAI」が世界共通語になるほどのグローバルな存在となった中、さらなる発展を目指して、日本で開催される大会としては2度目の世界大会が開催された。結果は、毎日が満員御礼と言えるほどの大盛況だった。

太宮ソニックシティでのオープニング式典では、秋篠宮殿下ご夫妻をはじめ、林芳正盆栽振興議員連盟会長、清水勇人さいたま市長等の方々のご臨席を頂き、安倍晋三首相からのビデオメッセージ、和太鼓によるアトラクション、世界中から招待されて会期中にデモンストレーション等を担当する盆栽のプロ達の紹介や、未来をなう子供達のメッセージボードによるパフォーマンスで会場からたくさん拍手が送られた。(敬称略)



世界各地から参加のデモンストレーター達の紹介



植竹小学校の生徒 70 人による未来へのメッセージ



大会名誉総裁の秋篠宮殿下が開会に向けてお言葉を述べられました。



◎ デモンストレーション



◎ 会場風景



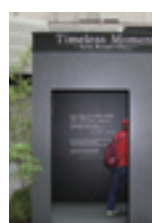
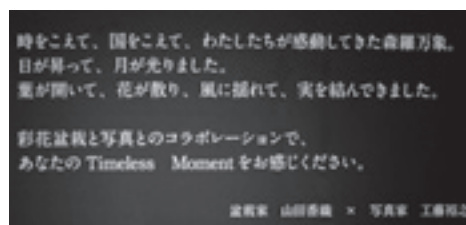


The 8th World Bonsai Convention, SAITAMA CITY

2017年4月27日(木)～30日(日)
さいたまスーパーアリーナ 他5カ所

◎ Timeless Moment

清香園・山田香織氏と写真家の工藤裕之氏による作品コラボレーション



作品を鑑賞する、さいたま市長 清水勇人氏(右)と山田香織氏



■プロフィール Profile

主宰：山田 香織

盆栽家
盆栽清香園五代目。彩花流盆栽家元。
NHK Eテレ「趣味の園芸」前キャスター
Kaori Yamada
Bonsai Artist



◎ 各種イベント

右列3点：NHK 趣味の園芸ステージ、上：盆栽体験コーナー
下：香川県の盆栽応援ガールズ・ユニット「ボンクラ」によるステージ



◎ グランドフィナーレ

次は、2021年 第9回 世界盆栽大会 オーストラリアで
お会いしましょう！



秋篠宮殿下ご夫妻が参観され、ご案内する当協会の山田会長(右写真中央)

「第8回 世界盆栽大会 IN さいたま」開催記念
武蔵一宮氷川神社 奉納盆栽水石展

作家展主旨

本協会が主催する作家展は、生きた伝承芸術、盆栽作家の精神高揚と高度な盆栽美を作出することにあります。

盆栽作家は人間性の豊かな感性を磨き、自然愛を基本とした芸術作品に表現されること、最も大切であり、お互いを研鑽し合い、盆栽文化の一層の発展を切望するものであります。

しかし、盆栽作家をめざす条件は大変に厳しく、自然との調和を図り、永い修練の中から体得し、その積み重ねから美の心を包摂する作業であります。今日の作家群が明日の社会にクリエイティブなボンサイ・アートとして、環境保全等に貢献できることを期待いたします。



第25回 作家展 後期

(前期・P7より続き)



黒松

鉢：中国紫泥長方

小林 國雄（東京都）

この黒松の樹皮は、荒々しく、とても男性的です。木の樹高と幹味を生かす為に芽数を少なくし、葉を力強くし、黒松らしさを表現してみました。

日本盆栽作家協会・ヨーロッパ支部主催

作家展「秋の木々」

2016年10月28日～31日 於イタリア・ローマ



写真提供「Nicola Kitora Crivelli」

今回の大会はローマ市内の植物園で開催された、園内にある温室を利用して盆栽と水石が陳列され、即席で作られた二席の床の間に盆栽が設えてあった。またその床の間を利用して、盆栽の飾り方「景道」の講義も行った。デモンストレーションは私とロレンソ、ロッシーの三人で行い通訳は毎回お世話になってい

るトリーニ先生にやっていた。昨年は海外公演が多かった。9か国を廻ってきた。その中でも特にイタリアは総合的レベルの高い国だ。盆栽飾りを通じて自分の精神を磨く研究をしている。再来年の日本ヨーロッパ作家協会がスペインで開かれることが決まった。今後の躍進に期待したい。

(小林國雄)

第1回ブラックシザーズ世界盆栽作家大会

2016年12月7日～8日 於中国・湖州市



中国湖州で開催されたブラックシザーズの大会は会長蘇放プロデュースの元、世界35か国、70名の作家を募って盛大に開催された。二日に渡りおよそ5時間で畑培養20年の真相素材を抽選で決めるので、公平な土俵で作家の技量が試される。作家によって初日で駄鉢のまま針金かけに集中する作家、場外の売店で鉢を選び植え替

えまで行う作家など、各々の作風を表現していた。

私の場合、鉢合わせはもちろん、苔貼り、卓飾りまで行い、日本盆栽の「調和の美」を各国の作家に示すように努めた。

会場は三つあり各国の代表者が宿泊し、盆栽界の状況を発表したホテル。バスで一時間の広大な阜月盆栽園はデモ会場と40以上の売店。バス5分のところにある別のホテルでは参加賞授与式とダンスパーティーが開かれた。

私も1996年から55か国以上の大会に参加しているがこれほどの人種が一同に会し、言語、人種を超えて世界交流する場は初めてだった。これもひとえに幅広い交友関係を持つ蘇放会長のなせる技だろう。

4月の世界大会では日本人作家一人一人が粋な心でおもてなしに努め、世界中の盆栽愛好家と縁を結べるようにしていき

(小林國雄)



栲（くぬぎ）

鉢：和鉢

松田 大実（神奈川県）

クヌギの盆栽は大変めずらしく、この樹は特に古さもあり幹模様はゆるやかに伸びがあります。この時期に観る葉の色彩は日一日と変化します。山里の秋を感じさせてくれる一鉢です。



皐月（秀峰の光） 鉢：白釉八角鉢 塚田 博巳（茨城県）

自然の風情や風を感じる盆栽を作りたいと挑戦しました。風を感じていただければ幸いです。



五葉松

鉢：和長方

馬場 守一（群馬県）

樹形的には好みもある形ですが、樹齢の古い木なので気に入っています。枝葉が綺麗な状態になりましたので今回出品しました。



花梨

鉢：和長方

山崎 純一（富山県）

本作は20年位前に畑上もの（繁殖された後、畑に植え替えられ太らせた素材）を入手し、以来培養に取り組んで作り上げたものです。今後は枝のほぐれや鉢映りなどを再度検討し、樹格向上に努めていきたいと思っています。



山もみじ 鉢：広東長方 菊岡 成泰（奈良県）

本作は、根張りよく、鉢持ち込みの時代を感じさせる山もみじの盆栽です。親幹から右に流れる景色を想像して作っております。秋の深まりが楽しみです。



赤松（鞍馬石付） 矢内 信幸（大阪府）

海岸線の松林を感じる作品。赤松の素材を丹念に選別し、苦勞と楽しみが同居した 20 年前の創作盆栽です。風の動きを感じる清々しさが伝わればと思います。



花梨

鉢：広東

野上 寿明（富山県）

10 年位前に畑上げ物を譲り受け、太い枝を切り戻し、ようやく今日の形になりました。今後はもっと小枝を作り込んでいきたいと思っています。

花梨

鉢：角切広東鉢

米沢 増雄（東京都）

永年かけて中型盆栽にまとめ上げた作品です。根張りの力強さが見どころのひとつです。角切広東鉢との調和も美しく、これからの紅葉が待ち遠しいです。



